

## -2019 年度教育職員特別研修報告書-

- 経営学部教授 小野 良太  
（ハワイ大学マノア校） 1【報告書】
  
- 現代中国学部教授 川村 亜樹  
（ニューヨーク市立大学バルーク校） 2【報告書】
  
- 国際コミュニケーション学部教授 塚本 鋭司  
（東京大学大学院教育学研究科） 3【報告書】
  
- 文学部准教授 中尾 充良  
（ベルサイユ大学現代社会文化史センター） 4【報告書】
  
- 文学部教授 神谷 智  
（国文学研究資料館） 5【報告書】
  
- 地域政策学部准教授 尼崎 光洋  
（シーナカリンウィロート大学） 6【報告書】

教育職員特別研修実績報告書

研修者	小野 良太
所属・職名	経営学部 教授
研修期間	2019年 9月 7日 ～ 2020年 9月 1日（361日間）
研修の種類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ③. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）
研修課題	アメリカにおける未来思考力（フォアサイト力）の教育やビジネスへの適用の実態調査
研修内容の概要	<p>研修（研究）は、米国ハワイ州のハワイ大学マノア校にあるコミュニケーション学部をベースに行った。大学側の責任者は、CIS PhD プログラム長でもある、コミュニケーション学部のジェニファー・ウィンター教授であった。</p> <p>毎週、様々な学部からの教授陣や PhD プログラムの学生達の研究が発表される CIS のセミナーに参加して、刺激を受けながら、自らの研究は大学の図書館での文献収集から始めた。そして、その途中経過を2020年1月末の CIS セミナーで発表し、その後は実態調査の為にデータ収集に進もうと考えていた。</p> <p>ところが、この頃からコロナ感染が広がり始め、ハワイ州に自宅待機令が出され、ハワイ大学も閉鎖され、人との交流というものが一切できない状況になってしまった。そこで、研修後半も文献研究を更に深めることに方針を変更して研究を進めた。</p>
研修成果の概要	<p>全ての研究者と教育者は、ある暗黙の前提を有して努力を続けている。その前提とは、新たに見つけた、そして伝えた知識が、それを受け取った側の人達によって理解され、彼らの思考と行動が、より良い未来へのより適切なものになっていくはずだというものである。しかし、社会的にも文明的にも良い未来を創れるか否かは彼らの手にかかっているにも拘わらず、多くの人々は <b>Status quo</b> の方に傾いてしまう。この現実、人や組織や社会の中には、「変わらない」、「変わらない」を後押しする何かが存在することを示していると考えられる。</p> <p>マズローは、大多数の人々は、自分に欠けているものを埋めていこうとする動機 (<b>Deficiency-motivated</b>) に促されて行動し、自己実現を果たした <b>Self-actualizing people</b> と称される僅かの人々のみが、成長という動機 (<b>Growth-motivated</b>) の元に動くことを明らかにしている。</p> <p>本研修では、この人間の心理的な動機と、自分たちにプラスをもたらすはずの知識に対する異なった反応に注目し、未来分析手法である <b>CLA (Causal Layered Analysis)</b> のフレームワークを用いながら、両者の間に存在すると考えられる関係を分析した。</p>

備考 研修内容及び研修成果を詳細に記したA4版リポート(様式任意 8,000~20,000字相当)を添付すること。

教育職員特別研修実績報告書

研修者	川村 亜樹
所属・職名	現代中国学部・教授
研修期間	2019年4月1日～ 2020年3月19日（354日間）
研修の種類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ③. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）
研修課題	アメリカ、および、日本の映画と小説をとおしたアダプテーション研究
研修内容の概要	映画祭研究を中心として、アダプテーション、メディア・エコロジー、環境批評関連の理論書を研究した。理論を踏まえたうえで、主流の国際映画祭である、カンヌ国際映画祭監督週間、ヴェネチア国際映画祭、トロント国際映画祭、ニューヨーク映画祭、サンダンス映画祭などのコンペティション作品をとおして、各映画祭の特徴とともに、グローバルなトレンド分析をおこない、また、これらすべての映画祭に参加して、開催方法などについても現地調査をおこなった。 さらに、アメリカの学会で、日本映画、および、日本のラップに関して研究発表をおこなった。これらの研究発表を反映するかたちで、受け入れ機関で、日本映画、および、日本のポップカルチャーに関する授業を聴講し、自身がプレゼンテーションをする機会も頂いた。
研修成果の概要	カンヌ国際映画祭からアメリカのアカデミー賞にいたる年間スケジュールのなかでコンペティション作品のラインナップや作品賞受賞作を見ていくと、新たな動きとして、Netflix映画の台頭がメディア・エコロジーの大きな変化を反映していることが分かった。また、2018年の『万引き家族』の流れで、2019年は『パラサイト』『ジョーカー』といった格差社会を持たざる者の側から描いた作品に注目が集まっていたといえるが、それと同時に、ゴールデングローブ賞でオークワフィナが主演女優賞を受賞し、また、サンダンス映画祭のグランプリをリー・アイザック・チョン監督の『Minari』が受賞したことも踏まえれば、アメリカの映画界におけるアジア系の台頭も顕著であることが分かった。そうしたなか、日本映画の動向に関しては、『真実』が国際映画祭でコンペティション作品に選ばれている状況を見れば、是枝裕和監督が日本というよりは、世界の監督となっていく一方で、「日本映画」を代表する、もう一人の日本人監督として、これまで『スキヤキ・ウエスタン ジャンゴ』（2007）などで注目を集め、2019年も『初恋』がカンヌ国際映画祭監督週間選出作品となった三池崇監督が、日本映画を特徴付けるジャンルであるヤクザ映画に、タイトルが示す若者の恋愛を繋ぎ合わせ、コミック的な要素や、薬物、日中関係などの社会事情をも盛り込んでおり、このジャンルの変容を見て取ることができた。そして、上記に挙げた作品がほぼアダプテーションでないことは、社会に対する文学の価値、小説と映画の関係性、メディア・エコロジーの変容といった観点から重要な発見であった。

## 教育職員特別研修実績報告書

研修者	塚本 鋭司
所属・職名	国際コミュニケーション学部 教授
研修期間	2019年 4月 1日～ 2020年 3月 31日（ 366 日間）
研修の種類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	①. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） ②. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ③. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）
研修課題	質的調査法と英語教育の研究
研修内容の概要	<p>東京大学大学院教育学研究科の能智正博教授のもと、質的研究法の歴史的な背景、分析対象となるデータの種類や収集方法、そのデータの分析法や、分析するにあたり、どのような理論を参考にするのかなど、多岐にわたり質的研究法について学んだ。また文化研究でよく使われるエスノグラフィーについての理解を深めた。</p> <p>英語教育については、東京大学大学院の斉藤兆史教授のもと、日本が歴史的にどのように英語を受け入れてきたかについて学んだ。また明治時代から昭和にかけて、偉人たちがどのように英語を学んだのか、という研究に触れることができ、今後日本での英語教育を考える上で、とても参考になった。</p>
研修成果の概要	<p>研究成果であるが、まず東京大学教育学研究科で学んだことをもとに、「質的研究法と異文化理解」という題の論文を、愛知大学語学教育研究室が発行する「言語と文化」43号に投稿した。この論文では、質的研究法の特徴や実証主義の研究方法との違いを述べ、主観的な視点と客観的な視点についての関係性を論じた。特に質的研究法の一つであるエスノグラフィーについて、それを支える理論、具体的には自然主義や構成主義について論述した。さらに研究者にとって外国語である英語でフィールドノートを作成することや、英語でインタビューをするときの留意点などを検証した。通常、現地の人たちの社会や文化を分析する時、現地の言語をかなり理解できなければならないが、研究者がその分析結果を論文や本で公表するときには、彼らの母国語で書くことがほとんどである。この論文はそこをあえて争点とし、研究対象の人たちの言語である英語で、文化や社会を分析して記述することにどのような意義があるのかを明らかにした。</p> <p>英語教育に関しては、まだ日本が鎖国の政策をとっていた江戸時代、長崎でオランダとの貿易を担っていたオランダ通詞が、自分たちが持っていたオランダ語の知識を活用して、英語を日本語に翻訳した。それ以来今日までの日本の英語に対する受容の歴史を学んだので、そのことを英語教育の研究に生かしたいと思う。英語の達人といわれる偉人たちの自伝を分析して、日本人にとって有効な英語学習法についての研究を今後進める予定である。</p>

教育職員特別研修実績報告書

研修者	中尾 充良
所属・職名	文学部 准教授
研修期間	2019年 4月 15日～ 2020年 3月 15日（ 336日間）
研修の種類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	1. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） ③. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修） 4. 他機関給付研修
研修課題	ヴィクトル・セガレン研究
研修内容の概要	ベルサイユ大学現代社会文化史研究センターに所属し、フランス国立図書館で、20世紀初頭にポリネシアや中国を旅した詩人、ヴィクトル・セガレンに関する資料を収集した。セガレンのポリネシア体験について、その精神的系譜を探るために、セガレンに先行し、その精神を引き継ぐとされるランボー、さらにその先行者であるルソーとの接点を探った。ランボー及びルソーを歩行者の文学と位置付けるとすれば、セガレンのそれは、航海者、騎乗者のそれにあたるのではあるまいか等々の仮説を考えた。これらに加えて、研修地の文化団体と交流し、日本文化の紹介にも努めた。
研修成果の概要	<p>学術論文 「二人の散策者—ルソーとランボー」 『松澤和宏教授体幹記念論集』(Variété numéro spécial) 名古屋大学文学部・人文学研究科フランス語フランス文学研究室 概要 フランス19世紀末の詩人ランボーの詩作品中の散策の場面と18世紀末の哲学者ルソーの散文作品中の散策の場面を比較することにより、約一世紀離れた両作家の自我意識の差異を明らかにした。ルソー的散策者が、古典主義時代に確立しロマン主義に受け継がれる強力な近代的自我によって支配されているのに対し、ランボー的散策者は、この世界から疎外化され周縁部を彷徨う弱い自我、崩壊の危機にある自我に支配されている。ランボーを受け継いだとされるセガレンの自我意識についての考察が次の課題となる。</p> <p>講演 Sur “Départures” de Yojiro Takita (Le petit cinéma de Meudon)2019/9 Sur “Dans un recoin de ce monde” de Sunao Katabuchi (同上)2019/10 Sur “Une affaire de famille” de Hirokazu Kore-eda (同上)2019/10</p>

教育職員特別研修実績報告書

研修者	神谷 智
所属・職名	文学部 教授
研修期間	2019年 4月 1日～ 2020年 3月 31日（366日間）
研修の種類 ※ 該当に○をつける。 （複数可）	①. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修） 2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修） 3. 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）
研修課題	「近世村落史料学」研究
研修内容の概要	<p>ア 国文学研究資料館に計9回訪問し、「近世村落史料」関係論文を閲覧し、そのなかから必要と思われる論文等を複写・収集した。複写・収集した論文等は、検地帳・名寄帳関係が102点、年貢免状関係が38点、村明細帳関係が30点、村入用帳関係が18点、五人組帳関係が6点、宗門改帳・人別帳関係が32点、宗門送り一札・村送り一札関係が4点、奉公人請状関係が6点、土地売買証文関係が12点、その他の村落史料の史料学関係が25点、史料学一般論関係が10点の計283点である。</p> <p>あと2～3回ほど国文研を訪問し、閲覧・複写・収集をする必要があったが、2月から3月にかけて新型コロナウイルス感染の懸念が高まったため、閲覧・複写・収集ができず、これらを完了することができなかった。</p> <p>以上の論文を読み、研究史上の評価、位置づけを行った。</p> <p>イ 西尾市岩瀬文庫に計48回訪問し、「旧一色町杉浦家文書」約1,500点、「旧吉良町颯田家文書」約150点等を整理し、史料分析をした。あと5～6回ほど岩瀬文庫を訪問し、文書整理をする必要があったが、こちらも2月から3月にかけて新型コロナウイルス感染の懸念が高まったため、整理ができなかった。なお、この分析をするなかで知立市歴史民俗史料館所蔵の史料も参考になると思われたため、知立市歴史民俗史料館へも計2回訪問した。</p>
研修成果の概要	<p>ア 論文の分析から、これまで関東・関西中心にまとめられていた研究史に、それ以外の地域研究を加えることにより、新たに研究史の再構築を行うことができた。</p> <p>イ 史料分析をしたなかから、とくに年貢免状について新たな論点を提示することができた。</p> <p>研究成果については、上記の新型コロナウイルス感染の懸念により必要な論文を収集しきれておらず、また収集しただけで読了できていない論文も多く、さらに全国的な雑誌に掲載された村落史料学に関する論文も収集しきれておらず、かつ当初想定していた関係論文の数が思いの外多かったこともあり、現段階ではいまだ十分な成果は上がっていない。</p> <p>研究成果の公表については、当初はこの研究の終了後1年間でまとめ、2年目に活字による公表をする予定であったが、上記のようにさまざまな問題が残っているので、予定を変更し、2年間でまとめ、3年目に活字による公表をするつもりである。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>

教育職員特別研修実績報告書

研修者	尼崎 光洋
所属・職名	地域政策学部・准教授
研修期間	2019年 8月 1日～ 2020年 3月 28日 (241日間)
研修の種類 ※ 該当に○をつける。 (複数可)	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 自宅特別研修（自宅から研究機関に通う研修）</li> <li>2. 国内特別研修（移住して研究機関に通う研修）</li> <li>③ 海外特別研修（海外の研究機関において研究する研修）</li> <li>4. 他機関給付研修</li> </ol>
研修課題	東南アジアにおける健康教育の実態に関する研究
研修内容の概要	<p>本研修では、WHO が2005年に健康づくりのためのバンコク憲章を提唱したタイを中心とした東南アジアにおいて、経済発展とともに高齢化の進む中、身体活動など人々の健康増進につながる健康行動に対して、どのような健康教育や活動が行われているか実態調査を行った。具体的には、東南アジア圏の各国に訪れ、市民が身体活動を行う中心市街地にある施設・場所（例：公園）を調査し、運動といった身体活動の実施状況を視察した。</p>
研修成果の概要	<p>本研修で視察した国は、東南アジア地域の9カ国（タイ、ミャンマー、インドネシア、ブルネイ、ラオス、シンガポール、マレーシア、カンボジア、ベトナム）であり、各国の首都もしくは大都市の中心市街地にある運動・身体活動ができる施設・場所（主に公園を約170箇所）を視察した。</p> <p>東南アジア地域の公園の環境をまとめると、公園内のウォーキング・ジョギング環境としては、タータン製のコースを設置する公園は稀であり、基本的にはウォーキング・ジョギング専用ではない歩道（アスファルト舗装またはレンガ舗装）を用いて市民がウォーキングやジョギングを行っていた。また、ウォーキング・ジョギングコース専用距離を示す看板や地面に距離を示すペイントを施す公園も少数ではあるが観察された。手軽に始められるスポーツであることから、各国でウォーキングやジョギングをする市民の様子を観察することができた。しかしながら、季節（雨季）の影響もあったのか、ミャンマーでウォーキングやジョギングをする市民はあまり観察されなかった。次に、公園内にサイクリング専用道を設けている公園はタイ・シンガポール・ブルネイの公園にのみ観察され、東南アジア地域では自転車を用いた運動があまり一般的でない様子が観察された。最後に、健康遊具の設置状況は、東南アジア各国の公園で観察された。ただし、健康遊具のメンテナンスは不十分であり、破損した健康遊具がそのまま放置されている様子が観察された。健康遊具に関して、タイ・バンコクは特徴的であり、公園内にトレーニングの機材（ダンベル、バーベル等）が屋外に置かれ、無料で利用できる公園や会員制（有料）の公園も存在した。公園の主な利用時間帯は夕方から夜にかけてであり、この時間帯が好まれる理由としては気候の影響もあると考えられる。</p>